

「この人 91」

吉原瑞雲 81歳 福島県

編集部 滑稽俳句を始められたきっかけは？

吉 原 三十年程前、事故の後遺症で右手で文字が書けなくなり、左手で俳句、川柳の筆写を始めました。滑稽俳句は、図書館で手にした雑誌で滑稽俳句協会の事を知り入会したのがきっかけです。

編集部 滑稽俳句の魅力とは？

吉 原 湘子先生が「入門 俳句の表現」の中で、「破顔一笑の句を求めつづけているのだが、いまだに会心の作に恵まれない。それでも私は、いつも滑稽をおもい俳諧味を念頭において句作するに違いない」と言っておられます。求めて簡単に手に入らない奥深さが滑稽俳句にはありますね。

編集部 俳句における「滑稽」とは？

吉 原 今の世より辛く厳しい時代に生きて感銘の作品を詠まれた良寛さんや一茶翁が何よりのお手本だと思います。

編集部 滑稽俳句を続けていて良かった事は？

吉 原 古きにとらわれず、老いてなお愉快でいられ、少々のお遊びを加えて作句ができることです。

編集部 滑稽俳句を作るコツは何でしょうか。

吉 原 滑稽俳句に触れてまだ日も浅く、十分なコメントができません。日を惜しまず勉強して行く所存ですので、ご指導お願いいたします。

「この人 91」

吉原瑞雲 81歳 福島県

【代表句】

鬼は外つましく生きて豆を撒く
ながらへて父に供ふるむかご飯
菜の花やひとりぼっちの卒業生
妻の留守「メシだ風呂だ」と言ってみる
太々と生きていただく恵方巻